

【第4分科会】JA都市農村交流課題抽出・「JAくらしの活動」間における連携についての課題

作成日：2010年7月28日  
作成：落合 秀年

	①課題	②提起する理由	③現状・事例	④懸念されること	⑤解決に向けた整理の方向(概要)
課題1	<p>【高齢者の活動支援メニューとの連携】</p> <p>健康づくり・いきがいくりの一環として、都市農村交流における高齢者の豊富な経験と知識に裏打ちされた役割を活かせる取り組みと仕組みが必要である。</p> <p>健康寿命100歳プロジェクトにおける役割の明確化をおこなう。</p>	<p>高齢者や中高年層が子どもや地域外の人たちとふれあい、交流することが、</p> <p>① 教えることが生み出す、高齢者の喜びからいきがいへとつながり、健康にも効果的、またなかまづくりにも有効である。</p> <p>② 地域文化や郷土料理の継承・伝承につながる。</p> <p>③ 昔からの地域特有の「良さ」が活かされていない。</p> <p>④ 地域の観光資源の再発見を担う役割が期待できる。</p>	<p>① 同地域における同世代どうしの場づくりが多い。</p> <p>② JAは生活、金融等、対応が一元化されておらず、活動の連携がはかられていない。</p> <p>③ 高齢者が持っている豊富な知識と経験、技術等が整理されていない。</p> <p>※ 今の農業の現状も伝える必要がある。</p>	<p>① その地域に伝わる無形の伝統や文化を継承できない。</p> <p>② 高齢者のいきがいくりに活用されない。</p> <p>③ 伝統的な家屋、農機具等がなおざりになる。</p> <p>④ 高齢者の地域で孤立・孤独化が進んでいく。</p>	<p>① 地域文化や郷土料理、農機具等の調査保存。</p> <p>② 高齢者が活躍するプログラムの作成。</p> <p>③ JAが対応を一元化できる仕組みの検討。</p>
課題2	<p>【地域が一体となったJA食農教育プログラムの展開】</p> <p>都市部JAと農村部JAが連携をはかり、消費者が地域内外の農業を学ぶ機会を提供する仕組みづくりが必要であり、特に都市部の子どもたちに向けた取り組みの強化が必要である。</p>	<p>① JAの店舗がない地域に対する「JA食農教育」が浸透しておらず、次世代に向けた取り組みとなっていない。</p> <p>② 消費者が「農」から「食」へとつながるプロセスを理解し、国産農産物の購入を増大させることが、農業者の生産への意欲になり、「食と農の循環」につなげることができる。</p>	<p>① JA、団体が各々取り組んでいるが、プログラムとして整理・確立していない。</p> <p>② 農業体験、料理体験や農産物加工体験等が一連のプログラムになっていない。</p> <p>③ 単発的な農業体験が多く、周年的な取り組みが少ない。</p> <p>④ JAでは地域内を対象とした取り組みが多い。</p> <p>⑤ 「出前授業」等の取り組みはあるが、まだまだ少ない。</p>	<p>① 体験プログラムに広がりを持たない。</p> <p>② プログラムが単一の傾向となっていて、体系だてたものになっていない。</p> <p>③ 受入れ体制(担当者)が十分でない。</p> <p>④ 子どもの体験が感動的に親に伝わらず、波及効果が期待できない。</p>	<p>① JAおちいまばり農産物直売所「さいさいきて屋」における「さいさいキッズクラブ」の調査。</p> <p>② (社)家の光協会が支援する「あぐりスクール」との連携の考究。</p> <p>③ JA子ども村の周年化への取り組みを検討。</p>
課題3	<p>【JAファーマーズ・マーケットを活用した交流の展開】</p> <p>A)生産者と消費者の「交流の拠点」としての機能を発揮することが必要である。</p> <p>B)JAファーマーズ・マーケット間の物流のみならず、生産者および消費者の交流を促進することが必要である。</p>	<p>① 生産者と消費者の「顔の見える関係」を築くためである。</p> <p>② つくり・育て・採り・食べる喜びを感じることできるJAらしい拠点展開・付加価値づくりが必要である。</p> <p>① 生産者相互の交流による意欲や技術の向上</p> <p>② 消費者の産地での生産者との交流によるJAグループ全体での取り組みに対する理解促進。</p>	<p>① 大型農産物直売所の競合が激化している。</p> <p>② 単なる農産物の販売にとどまっておらず、スーパー等との差別化が明確でない。</p> <p>③ JA食農教育における「食」の役割を發揮できていない。</p> <p>① 物流間の取り組みに限られており、消費者または生産者の交流はあまり行われていない。</p> <p>② 実施している場合でも生産者同士の交流にとどまっておらず、消費者の交流には至っていない。</p> <p>③ 農協観光では都市部のスーパーの主催する産地見学ツアーを実施したことがある。</p>	<p>① 消費者に地産地消の意義を伝える機会がなくなる。</p> <p>② 民間スーパー等との差別化がはかれない。</p> <p>③ 商圏の拡大をはかることができない。</p> <p>① 地域外の農産物を取り扱うことへの理解がはかれない。</p> <p>② 農産物に対する安全・安心の面で、消費者に不安を与える可能性が生じ、地産地消(安心感)をうたう店舗全体のイメージに影響を与える可能性がある。</p>	<p>① JAおよびJAグループの交流拠点計画(JAホクレン「くるるの杜」等)</p> <p>② 出荷先直売所での出荷元生産者による販売体制の整備。</p> <p>③ 直売所間提携を促進する体制を整備。</p> <p>④ インショップ、商店街、アンテナショップ等を利用する消費者と生産者との交流の把握。</p> <p>ハッピーロード大山商店街 全国ふる里ふれあいショップ 「とれたて村」</p>
課題4	<p>【貸農園・体験農園の整備・活用】</p> <p>貸農園等の開設・整備をすすめ、一定の地域を往来する都市農村交流を促進する。</p> <p>これに伴う滞在施設の整備、二地域居住への展開等についても検討する必要がある。</p>	<p>① リピーターを確保する上で有効な取り組みである。</p> <p>② 休耕地を活用による景観・環境等の保全に有効である。</p> <p>③ 一定の経済的な効果も期待できる。</p>	<p>① 補助事業で実施されたクライנגルテン等の事例はあるが、施設の保守に負担がかかりすぎている。</p> <p>② 地域内の市民農園が中心となっていて、地域外を受け入れる貸農園・体験農園を開設する意義が整理されていない。</p>	<p>① 法改正による規制緩和が進むなか、JA以外が主体となって取り組みをすすめる、行政とJAが連携した展開を図ることができない。</p> <p>② 休耕地の増加に対する解決策を見出すことができない。</p>	<p>① 神奈川県大井町における農協観光協会の事例</p> <p>② 定年帰農者と耕作放棄地を活用したJAはだの「さわやか農園」の事例</p> <p>③ JTBと相模原市のボランティア団体が実施する「宿借(やどかり)農園」の事例</p>

【第4分科会】JA都市農村交流課題抽出・「JAくらしの活動」間における連携についての課題

作成日：2010年7月28日  
作成：落合 秀年

<p>課題5</p>	<p>【JA女性組織と連携した取り組み】 得意分野を活かした女性らしい受入体制の整備</p>	<p>① 農家体験・料理体験・加工品体験においては女性の活躍が必要である。 ② 都市農村交流は、加工品生産販売・農家レストラン等の起業に結びつくことが多い。</p>	<p>① 女性組織の活動が都市部の人たちに広く知らされていない。 ② 女性組織の活動計画において、都市農村交流の具体的な取り組みが明記されていない。</p>	<p>① 女性組織が都市農村交流に組み込まれる機会がなくなる。 ② 都市農村交流の取り組みには女性の力が不可欠であり、取り組みが大きく進めることができない。</p>	<p>① 女性部が実施する都市農村交流における役割の整理 ② 女性(グループ)が経営する農家レストラン・加工品生産の事例 ・秋田市 農家レストラン地張庵</p>
<p>検討課題</p>	<p>【JA青年組織と連携した取り組み】 JAが主体となって進める「婚活」の体制を整備する</p>				